



Гэгээнхүүгийн Амьдрах Орчныг Сайжруулах
гэрээр ногоо тариалах оролдлого

モンゴル国ウランバートル市ゲル地区
住環境の自律改善
2009年度活動報告書

もくじ

第一部 シンポジウム記録

2009年12月9日(水) 16:30より18:00 埼玉大学教養学部大会議室

2009年12月10日(木) 18:00より20:00 浦和PARCOコムナーレ

- 1 学校での野菜作りの試みと今後の課題について
ヤサイ・アミド先生(ウランバートル市バヤンズルフ区第53学校理科教師)
- 3 ゲル地区の環境緑化について
ハルタル・ダワー氏(ウランバートル市バヤンズルフ区第24ホロ協力住民)
- 5 地域と学校をどうつなぐか? ; 2年間の取り組みを通して見えてきたこと

安藤聡彦

第二部 活動記録

- | | | |
|----|-------------------------------|----------|
| 9 | 第1回モンゴル訪問記録:2009.4.29. – 5.5. | 安藤聡彦 |
| 13 | 第2回モンゴル訪問記録:2009.4.29. – 5.5. | 安藤聡彦 |
| 19 | 第3回モンゴル訪問記録:2009.4.29. – 5.5. | 梶島邦江・清水昇 |
| 24 | 第4回モンゴル訪問記録:2009.4.29. – 5.5. | 三浦 敦 |



■我々の活動を支援してくださった次の方々に感謝します。

JICA地球ひろば・埼玉デスク、JICAモンゴル事務所、株式会社トキタ種苗
ウランバートル市バヤンズルフ区第24ホロー、協力世帯の皆さん
ウランバートル市バヤンズルフ区第53学校、埼玉大学

■本プロジェクトは、下記の助成金および自己資金を下に行われました。関係機関に感謝致します。

JICA市民参加協力事業
埼玉大学国際会議等開催支援費
[自己資金56万円]

■Special Thanks

メグさん
バイラさん

■埼玉大学地域社会活性化プロジェクトチーム

梶島邦江(代表・埼玉大学教養学部教授)
山本 充(副代表・埼玉大学教養学部教授)
清水 昇(埼玉県庁農政部技官)
安藤聡彦(埼玉大学教育学部教授)
三浦 敦(埼玉大学教養学部教授)
ルヴサンジャムツ・スレンバートル(モンゴル人文大学准教授)
ナヤンバートル・アマルジャルガル(埼玉大学大学院日本アジア研究科博士課程)

第1部

学校での野菜作りの試みと今後の課題について

ヤサイ・アミド(バヤンズルプ区第53学校理科教師)

第53小中高一貫学校は1973年に設立されました。現在、教師70人、職員23人がおり、生徒数は1,600人です。このうち、小学生972人、中学生464人、高校生176人がいます。基礎教育の指導要領において、自然教育の目標は、「自然と共存する技術を学習し、生きている自然に関する知識・技能を身につけること」とされています。これらの目標に向けて、過去2年間で学校の敷地内で野菜作りのための畑を作り、次に述べることを実施しました。

■教育関連事業

理科の授業時間で、一週間に2時間、6年生から11年生の生徒に対して、ジャガイモ、にんじん、カブやその他の野菜の育て方について指導しました。具体的な内容として：

- 作る野菜の種選び
- 土作り、肥料について
- 種まきのプロセス
- 栽培中の管理：水やり、肥料、害虫対策など

■場所選びや他の準備作業

- 埼玉大学の地域社会活性化プロジェクトチームの皆さんと相談した上で、学校の中庭の一区画を選びました。この場所は、日当たりがよく、強風に直接当たらない、水やりをしやすいなどの状況を考慮して選びました。
- 畑仕事用の道具(つるはし、スコップ、レイキ、ジョウロなど)や種芋、長ネギ、大根、白カブ、にんじん、ターサイ、春菊などの種を日本側のみなさんが提供してくれました。
- 畑の周りに、長さ25mの柵を作りました。
- 1年生から6年生の生徒が、畑の石、砂利、ごみを拾い、除草作業をしました。
- 7年生から9年生の生徒が土作りの作業を行いました。既存の土に、トラック一台の黒い土、砂10袋、長年おいた家畜の糞、鳥の糞3キロを混ぜて、最終的に畑の表面を平らにしました。
- 11年生の生徒は、畑の柵沿いに11本の針葉樹を植える作業を行いました。
- 種をまく前に、畑全体にしっかりと水を含ませました。その後、スコップで土を耕し、黒い土、砂、長年おいた家畜の糞、鳥の糞などをまんべんなく混ぜて、土づくりをしました。(この作業は、10年生が行いました。)
- 四角いスペースを準備し、種まきを行いました。

- | | |
|----------|---|
| A. ジャガイモ | $4\text{m} \times 4\text{m} = 16\text{m}^2$ |
| B. にんじん | $1.5\text{m} \times 1.5\text{m} = 2.25\text{m}^2$ |
| C. 大根 | $1.5\text{m} \times 1.5\text{m} = 2.25\text{m}^2$ |
| D. 白カブ | $1.5\text{m} \times 1.5\text{m} = 2.25\text{m}^2$ |
| E. 長ネギ | $1.5\text{m} \times 1.5\text{m} = 2.25\text{m}^2$ |
| F. 春菊 | $1\text{m} \times 1\text{m} = 1\text{m}^2$ |
| G. ターサイ | $1\text{m} \times 1\text{m} = 1\text{m}^2$ |

夏休みの間は、高学年の生徒と教職員が交代で、水やりや雑草とりをし、マンノウなどで中耕をし、土をよせる作業をしました。ジャガイモの花が咲いたときに花を取り、長ネギ、大根、カブなどは随時中耕をしました。

家畜や鳥の糞は、水の入った小さめのドラム缶に溶かし、3回にかけて追肥をしました。これらの作業は10年C組の生徒が交代で行いました。水やりの水は、畑の近くにドラム缶を置き、1日おいてか

ら使いました。このような作業を行った結果、たくさんの収穫をすることができました。

ジャガイモ 約30キロ
にんじん 約10キロ
白いカブ 約15キロ
大根 約15キロ
長ネギ 約5キロ

今年は、実験的に小さめの畑で生徒と一緒に、野菜作りと育て方の体験学習を試みました。生徒たちは、空いているスペースで野菜作りができること、自分たちが育てた野菜を食事に使えることを実際に感じて、理解したと思われます。

■収穫祭をしました！

1. 8年生から11年生の生徒が、学校の畑、または自分が住む家の敷地内で育てた野菜を使って調理をし、収穫祭をしました。
2. 日本側のみなさん、野菜クラブの人々と第53学校の教職員が共同で今年度の野菜作りの結果を話し合い、収穫した野菜を使った料理を持ち寄って、お互い紹介し、試食しました。
3. 日本側のみなさんが、第53学校の生徒たちに花の種を提供してくれて、その花を室内で育てるポイントを教えてくれました。

■野菜づくりをする際の困ったこと

- ・ 土壌が非常に硬くて、スコップだけで耕すのは無理でした。
- ・ ジャガイモを植えた場所の土が、水やりをした後固くなりやすくて、マンノウを使って中耕をしていました。
- ・ 8月にジャガイモの葉っぱが黄色くなり、枯れてきました。

■今後の作業予定

1. 現在の畑を拡大し、野菜、穀物、花など、植える植物の種類ごとに場所選びをします。
2. 畑の近くで果物になる低木、樹木を植えます。
3. 苗用の温室を作ります。
4. 温室を作り、きゅうり、トマト、瓜などを育て、学校給食で使うことを考えています。

このように、一度はじめたことは最後までがんばり、成果を得るために全生徒と教職員が努力していきたいと思っています。

本プロジェクトの日本側の皆様は、我が校の生徒たちに、野菜作りや花の育て方の知識を身につけ、体験学習する機会を与えてくれました。また、我が校のミニ環境づくりに多大の知識を共有し、支援してくださっています。皆様に大変感謝していることを、学校を代表してこの機会に伝えたいと思います。



ゲル地区の環境緑化について

ハルタル・ダワー（バヤンズルフ区第24ホロー協力住民）

■野菜作りをはじめる

私は、ウランバートル市バヤンズルフ区において、244㎡の土地を所有するようになり、敷地内でゲル地区の環境緑化、家庭菜園を試みています。

敷地内の土地は傾斜があり、砂利や石が多く、野菜作りにあまり適していません。敷地内の建物と通路以外のところを平らにし、砂利や石をのぞき、野菜がよく育つ黒い土と砂、長年おいた家畜の糞と灰などを土壌に混ぜて土作りをしました。よく水を加え、ジャガイモと長ネギを植えました。その隣でブルーベリー、ゴールドエンベリーなど果樹を植えました。また、建物の前に30本の低木を植えました。

部屋の中では、観葉植物を挿し木で殖やし、それぞれ鉢に植え替え、40本の観葉植物を部屋の中で育てました。観葉植物をおくことで、部屋の中の空気がきれいになり、気持ちも高まります。また、それらを売ることによって家計への助けにもなります。

今までの野菜作りの経験から言うと、土壌の質がよいゲル地区の敷地内でも十分に野菜が育つことがわかりました。たとえば、15キロの種芋から50キロのジャガイモを収穫し、10キロを家庭用にとっておいて、残りは、子供夫婦、親戚に分けてあげました。野菜作りの効果はこれだけではなく、食料の購入を減らし、また、余った分を売ることによって家計の助けにもなります。

2007年、日本に留学している学生さんが24ホローのホロー長と一緒にうちを訪ねてきました。野菜作りの話をたくさんして、また今度来ると彼らは帰っていきました。

■温室を作る

埼玉大学の地域社会活性化プロジェクトチームの皆さんが1m×4mのビニルトンネルを作り、野菜作りのアドバイスをしてくれました。このビニルトンネルで、白菜、大根、長ネギ、キャベツという今まで作ったことのない野菜の種を、育て方を教えてもらいながら、一緒に蒔きました。

野菜は、4月20日に種まきをし、葉が3、4枚、高さが20～25センチになったところで、6月15日に移植しました。ビニルトンネルの中で野菜の育ちが非常に良かったので、今度は廃車の窓ガラスを使って、2.5m×5mの本格的な温室を建ててみました。この温室の中で、きゅうり50本、トマト40本の苗を買って植えてみましたところ、きゅうり約30キロ、トマト約20キロを収穫することができました。このようにさまざまな勉強をし、経験を積み重ねています。温室で育ったきゅうりで一番大きいものは、1本860グラム、小さいもので1本450グラムでした。トマトは、冬期間、部屋の中でも育つので、日常的に食事に取り入れています。

■苗作りの工夫

苗作りにはさまざまな方法がありますが、木材で作った四角い容器と紙コップを使うことを試してみました。苗床には長年おいた家畜の糞、黒い土と砂、少しの灰を混ぜ、その中に野菜の種を植え付けます。播種は3月15日ごろ、移植は4月の末ごろを考えています。そうすれば収穫の期間が長くなり、8月から9月あたりに収穫できると思います。9月に種を取るつもりです。

■水やりの苦労

野菜作りにとって一番大事なことは水やりです。モンゴルでは、水の確保が大変大きな問題です。家から500m～600m離れた給水所から、60～80リットルの容器で水を買って運んできます。その水を飲み水と洗濯、野菜作りなどに使っています。また、屋根上の雨水を利用する目的で、屋根の下に200リットルのドラム缶をおきました。このドラム缶にたまった水を、ペットボトルに入れて、野菜に水やりすることで、水を節約しています。なぜならば、この方法は植物の根っここのところに数日間湿気を

与える良い効果があるからです。

■野菜作りの苦労と楽しさ

野菜作りはそんなに楽な仕事ではありません。モンゴルのゲル地区では特に大変なことが多いです。しかし、大変なことでも良い結果につながると考えて、遠くから毎日水を運んできて、野菜に水やりをし、雑草を抜いて、土を固まらないようにすることを、日々絶えず行うことが良い収穫につながります。収穫だけではなく、苦労をした分やり遂げた気持ちになれます。

このように、今まで勉強してきた、経験してきたこと、また日本のみなさんに教えていただいたことを隣近所の人や第53学校の生徒や先生たちにも話をしてきました。

今後、埼玉大学の地域社会活性化プロジェクトの皆様、バヤンズルフ区第53学校の皆様と一緒に野菜作りに励みたいと思っています。さらに、この共同作業の一員として、第24ホローに住んでいる人々、世帯に野菜作りの楽しさ、やりがいアピールし、自分の経験ややり方を教える活動をしていきたいと思っています。

自分たちが住んでいる敷地内で野菜作りをする、樹木を植えることで環境の緑化を進める機会が大いにあることを、第24ホローの住民の人々に伝えていきたいと思っています。

しかし、一番大きな課題はやっぱり水やりのことです。飲み水を遠くから運ぶこと自体とても大変なのですが、その水を野菜のために使うことに対して、すごく心細くなるときがあります。この課題をみなさんと一緒に解決する、軽減することができればいいなと思っています。



地域と学校をどうつなぐか？ 2年間の取り組みを通して見えてきたこと

安藤聡彦

■2年間の活動を振り返る

われわれは2008年から2年間、モンゴル国ウランバートル市バヤンズルフ区の住宅不良地区(ゲル地区)で、家庭菜園を住民に普及させるプロジェクトを進めてきました。プロジェクトの目的は、住民に家庭菜園を作ってもらうことを通じて、野菜を食事の中に取り入れることにより食生活を多様化して行ってもらい、さらには住民の環境への意識の改善を図るとともに、住民の間に協力関係を生み出すことにあります。そしてそのために、単に住民に飲み働きかけるのではなく、第53学校という学校と協力していくことを試んでいます。

2008年度には、まず、第一回訪問(4月末～5月初)でまず、7つの協力世帯を行政の協力により選定し、それぞれの過程に家庭菜園を作ってもらうをお願いし、趣旨を配布して栽培指導を行いました。第二回訪問(7月下旬)では、これらの先駆け世帯の野菜の発育状況をチェックし、また第53学校と具体的な協力の可能性について話し合いを持ちました。また、同様の活動をしている現地NGOや政府機関も訪問しヒアリングを行いました。そして第三回訪問(10月初旬)ではこれらの先駆け世帯を第53学校にお招きして成果報告会を開催し、あわせて収穫された野菜を使って栽培教室と懇親会を開きました。そして第4回訪問(2009年3月)には第53学校を拠点として、住民約50名が参加する「野菜クラブ」を立ち上げ、栽培に向けたワークショップを行った他、新年度に向けた相談を住民の方々や学校の先生方と相談しました。また、12月上旬にはモンゴル理工科大学のゴンチクバト教授と第53学校教頭のタンガト先生を日本にお招きしてシンポジウムを実施しました。

2009年度には、まず第一回訪問(4月末～5月初)で野菜クラブの設立総会を開いた後、その野菜クラブで先導的な役割をお願いしている先駆け世帯を訪問し、種子等を配布し道具などを貸し出しました。第二回訪問(7月中旬)では、家庭菜園作りに参加している家庭を訪問して生育状況を調べた後、野菜クラブの研修訪問を実施しました。第三回訪問(9月中旬)には収穫祭をかねた成果報告会を、先駆け世帯、野菜クラブ、第53学校および現地協力者とともにに行い、ワークショップを実施しました。また、先駆け世帯などを訪問し、また学校からヒアリングを行いました。そして第四回訪問(10月末)では、今後の活動の展開について第53学校と話し合いを行いました。また前年度と同様、12月上旬には第53学校のアミド先生と先駆け世帯のダワーさんをお招きしてシンポジウムを開いた他、一緒に日本の農家や学校を訪ねました。



■「家庭菜園づくり」を通して見えてきた地域社会の特色

以上の2年間の活動から、いくつかのゲル地区の特徴が見えてきました。まず、家庭菜園作りには様々な人が参加していますが、このゲル地区が各地からウランバートルにやってきた人々によって作られた新しい居住地区であり、住民の人々の間には様々なバックグラウンドがあることが分かりました。そのため、住民の皆さんの野菜作りの経験は多様であり、経験のある人もいれば全く未経験の人もいるなど、野菜作りの知識の度合いも多様でした。

また、このように新たに生まれた居住地区であるために、近隣住民の間での交流はあまりないこと

が分かりました。そのため、家庭菜園作りに関わる知識や経験の交流も、今のところはそれほど活発ではありません。とはいえ、一部にはこの家庭菜園作りをきっかけに、こうした知識や経験の交換、さらには実際の労働の交換に関わる交流や協力も生まれ始めました。

このように「家庭菜園作り」は、単に野菜を作る(そしてそれによって食事を多様化したり家計の足しにする)というだけではなく、それを通した新たなコミュニティを形成する可能性も持っています。

■「家庭菜園づくり」を通して見えてきた学校の特徴

このような、お互いに教え合い協力し合うコミュニティ作りが、また家庭菜園の普及には不可欠です。そこでこうしたコミュニティ作りを支援するためにわれわれは地域の学校にも協力をお願いしました。そしてその第一歩として、クラブ活動を通しての学校菜園づくりを始めました。とはいえ、住民と同様に教師たちも、野菜栽培やその指導の経験は、一部の先生にはあってもその他の先生には全くありませんでした。社会主義時代にはそうした栽培教育がカリキュラムとして行われていたため、そのころから教師を務めていた者は栽培教育ができるが、ポスト社会主義時代に教師になった者にはそうした知識は欠けていました。



また、もう一つの問題がありました。それは、学校と地域社会との距離が必ずしも近くはなかった、ということです。学校と地域社会は常に交流してきたわけではなく、あくまで児童・生徒を通してのみ関わりを持ってきました。この点は「地域とどうかかわるか、なんて考えてみたこともありませんでした」という、ある日本の中学校教師の回想にも通じるものがあります。

学校は「家庭菜園づくり」に対して、何ができるのでしょうか。また、そもそも学校の教育課程において、野菜づくりを学校はどのように位置づけて行くのでしょうか。

4. 「共同体の核としての学校」の可能性

地域社会と緊密な連携関係にある学校づくりは、イギリスやアメリカ等で20世紀の両大戦間期に構想・実験され、その考えは「地域社会学校」(コミュニティ・スクール)の名のもとに戦後になって日本にも導入されてきました。このような地域社会学校は、地域社会の核となることが期待できます。マンフォードは次のように指摘しています。

教会は中世都市に欠かせない社会的核であった。・・・来るべき生技術経済の新しい支配因子は何か。それはすぐ身近にある。住宅と学校が特別の共同援助によって新しい共同体の本質的核になるのである。そして、新しい地域は拡大された都市であるので、われわれはすべての見事に組織され、見事に開発された地域のなかに類似の施設を発見するであろう。それらの施設は一階級や少数集団に奉仕するのではなく、共同体全体の器官として活動する。

(マンフォード『都市の文化』〔1938年〕「新しい都市の社会的基礎」)

ウランバートルの学校が、野菜づくりを通してこのような役割を地域で果たしていくことができるようになれば、ゲル地区の住民の間に日常的な社会関係を作り出していくことが可能になるでしょう。

■求められる「地域と学校のつながり」とは

それでは、そのような地域の核となる学校には、どのような地域とのつながりが求められているのでしょうか。こうした点で参考になるのが、いくつかの日本の学校の試みです。

まず第一に、学校を地域社会に開いていくという形が考えられますが、その例が埼玉県立いずみ高校です。この高校では、教師は単に自分の高校の学生に授業をするだけではなく、一般市民を対象とした園芸講座も開き、地域住民の人々にも学習機会を提供しています。

第二の例はその逆で、地域社会が学校と協同して教育を行うというもので、その例が山形県高畠町立二井宿小学校です。多くの住民が農業を営んでいるこの地区では、小学校の食農教育実践に地域住民が協力し、地域住民が教師となって児童に授業を行い、小学校の教師は地域住民と児童を結ぶコーディネーターとなっています。

2009年12月にアミド先生とダワーさんが日本に来られたおりに、一緒にこれらの学校を訪ねたところ、お二人とこれらの学校の先生は意気投合をしておられました。

■私たちの課題

以上のことから最後に、われわれはこれからどのように活動を、特に学校を舞台に展開していくべきかを考えてみましょう。

まず何よりも重要なことは、学校が栽培教育を充実させ、同時に学校が自らを地域住民に開いていくことが必要でしょう。そして同時に地域住民の側もまた、学校に対して様々な海路を通してアプローチをし、学校と協働していくことも必要です。

そしてわれわれはその双方向のプロセスを支援していく必要があります。そしてその支援のためにはまず、学校と地域住民の両者がそれぞれ何を求めているのか、そのニーズの背後に何があるのかを深く理解していく必要があります。

さて、ウランバートルでは一体何が育っていくのでしょうか。



第2部

第1回モンゴル訪問記録:2009.4.29. – 5.5.

安藤聡彦

■4月30日:第53学校訪問

清水、安藤、スレンが午前10時に第53学校を訪ね、校長とタンガド先生とお昼過ぎまで打合せをした。

校長からは、5月以降、夏休みにかけて、野菜クラブ(教師+生徒及び保護者)を中心に栽培の取り組みを行う予定であり、そのために6年生から11年生までの各学年で、土づくりや栽培の初歩について理科等の時間を用いて教え手いるとの報告を受けた。野菜クラブそのものには、30~50世帯が参加する予定とのことで、学校の中庭には、すでに黒土等を運び込んで学校菜園を作り始めている。中庭とグランドとの境界にはフェンスをつくる予定(すでに使い回しの材料はおさえてある)である。さらに中庭内に、長さ7m、高さ2m程度の温室をつくりたいと考えており、すでに見積もりもとってある(102,500tug)。水はたくさん用いることはできないが、将来的には井戸を掘ることも考えたいということであった。以上の内容について細部を検討した後、午後購入に行く農具について相談をした。この点について第53学校としては、この農具はもっぱら第53学校の子どもたちが使うものとし、野菜クラブの参加者は個々道具を用意してもらうことにしたいのでそのむね土曜日の総会のおりに伝えたい、ということであった。また、野菜クラブの運営にあたってさらに経費が必要となる場合には、別途徴収などの方策も考えたい、ということであった。打合せの後、野菜クラブで利用することになる部屋、及び中庭を見て回った。

午後は、農具を中央市場等で買った。全部で149,200tugであった。午後4時から、二井宿小学校とのYahoo Messengerでの交流実験を行おうとしたが、先方がYahoo.JapanのIDであるのに対し、こちらはYahoo.comのそれであったため、結局交信することができなかった。まことに初歩的なミスであった。校長やタンガド先生のほか、アミード先生など、数名の先生が期待とともに来られていたので、まことに残念であった。

そのあと、1時間あまり、野菜クラブや栽培教育についての、第53学校の方針を伺い、議論した。野菜クラブについては、同校で理科を担当し栽培経験もある3人の教師(アミード、アルタントヤ、アリューナの各先生)、及び栽培経験のある住民3-4軒が相談役となってすすめていく予定であるということである。外部のアドバイザーについては当面は考えておらず、例えば30軒であれば、それを5軒ずつ6グループにわけ、各グループに1名ずつリーダーを配置し、そのリーダーたちが、定期的に学校で会議を開く、という運びにしたいということである。温室については、できるかぎり早く設置したいと考えており、温室ができ次第、キュウリやトマトを栽培したり、(清水さんが提案されるような)苗作りをしたりをして、クラブ参加者に配布できるようにしたいという意向であった。二井宿小学校がもっているような正式なカリキュラムはいまのところないが、来年度1年間は試行錯誤を行い、その次の年度までにはカリキュラムをつくりたいというのが、学校側の考えであった。

■5月1日:ホロー長訪問・国立農業大学バトムンキ教授訪問

10時半に第24ホローの新ホロー長ドゥーヘーフ氏を訪問。10時に約束と間違えており、しかもここ数日は多忙ということで、挨拶程度ですませ、5日の午後1時に再度お会いすることになった。第24ホロー議会議長のスフバートル氏を紹介していただく。氏は、他のホローで農業活動の指導に関与したことがある、ということであった。明日の野菜クラブ総会にご招待すると、部下を行かせるとご返事くださった。

フラワー・ホテルで梶島先生と合流。前2日の成果を報告し、今後のスケジュールを議論した。

午後は、国立農業大学にバトムンキ先生を訪ねるが、こちらも日程を勘違いして外出中とのことで、しばらく待つようやくお会いできた。種芋の購入をお願いすると、学内ではすぐには準備できない、ということで、明朝までに50キロ用意してください、ということになった。またアカデミー

の土壌検査結果の読み方について、清水さんが詳しくヒアリングを行った。大学院生をひとり、翌日の総会に派遣して下さることになった。

その後は、園芸店で種子の買い出しなどを行い、早めにホテルに戻って、種子の袋詰めを行った。夕食をはさんで、終了したのは午後 11 時過ぎであった。

なお、夕食は「サクラ」(ケンピンスキー・ホテル)にゴンチクバト教授、バトムンキ教授、および第 53 学校校長をお招きした。バトムンキ教授と校長は同じアパートに住んでいる顔なじみであるとのこと。梶島さんから、2012 年度までの活動計画概要の説明があった。温室づくりについては、「緑の革命」事業の一環として農業省が温室作りに補助金を出している、それを申請するものよいのでは、というアドバイスがバトムンキ先生からあった。

■5 月 2 日:野菜クラブ設立総会

10 時少し前に第 53 学校へ向かう。すでに種芋 60 キロ(ロシア産 40 キロ、モンゴル産 20 キロ)は学校に到着していた。すぐに種芋の袋詰めや、種子袋への説明書貼り付け、さらに会場準備などを行った。

10 時半過ぎから徐々に参加者が訪れ、最終的に受付を通過した野菜クラブ参加者(世帯)は 28 軒となった。ダワードルジさんの息子さんの顔もあった。農業大学の大学院生ツェレンフさんも来てくれた。受付では、航空写真上に自宅をポイントする作業に苦労される方が少なからずいた。28 軒なので混乱はなかったが、もう 10 軒、20 軒あったらかなり大変であったことと思われる。受付の横では、第 53 学校のスタッフが来訪者の確認を行っていた。

11 時 10 分くらいから、総会を始めた。メグさんの通訳で梶島先生が全体説明を行い、清水さんが野菜栽培法についての説明を行った。参加者の皆さんは、全体としてよく聞いておられた。質問としては、「自分のところの土地は農業には向かないので、もっと山に近いほうで育てたいのだが、それでもかまわないか」というものが一件あったので、われわれは「最終的には個人の判断であるが、私たちとしてはバヤンズルフ区の緑化推進を目的としてこの事業をすすめている」ということを強調した。また、タンガード先生やアミード先生から、グループづくりについての細かな指導がなされた。

説明の終了後、種子の配布作業を行った。ニンジン、カブ、大根、ターサイ、春菊、白菜、ジャガイモ、そして埼玉の地場野菜の野良棒菜(のらぼう菜)、を用意した。ジャガイモ他、いくつかのものがあまった。学校に一部は渡し、それ以外は別途配布用として持ち帰った。

総会終了後、校長室で懇談を行う。「グループづくりはうまくいかなかったので、15 日以降に予定している、学校菜園での種まきのデモンストレーションの際に、もう一度やってみる」とタンガード先生。今後の作業の進捗状況をウェブにアップしてほしいということを伝え、了解していた(<http://esurguuli.mn/indexc.php?v=28>)。

中華料理店で、メグさんおよびツェレンフさんをまじえ昼食をとった。ツェレンフさんは、モンゴルの伝統治療にかかわる薬草の保全管理法を研究しているという、大変優秀な女性だった。またひとりよい助っ人が現れた感じである。

その後はオフにして、買い物、そしてオペラへとまわった。

■5 月 3 日:NGO 訪問・協力世帯訪問

朝一番で第 53 学校に隣接する児童養護施設の SOS へ。ここは、オーストラリアを本拠とする NGO のモンゴルの拠点にあたる、ということである。詳細はホームページに述べられている(<http://www.sos-childrensvillages.org/pages/default.aspx>)。まずは栽培活動の現況についてお伺いし、夕方またお伺いすることを約束して辞去した。

その後、5 軒のお宅を一気に訪問。

ダワードルジさんのお宅には、昨日総会に参加して下さった息子さんは不在だった(ケンピンスキー・ホテルのゲルに現在は別居しているとのことである)。そこで奥さんと娘さんに会い、今年の野菜栽培とクラブへの参加をお願いした。庭では、温室の準備など、今年の栽培活動の準備が着々と進められていた。

バドアムガランさんのお宅では、最初は奥さんにお会いしたが、やがて旦那さんが戻ってこられたので、それぞれとお話した。畑では、ネギが越冬しており、またすでにジャガイモが植えられていた。道路に面した路地に、コスモス及び朝顔の栽培をお願いした。今年の野菜栽培とクラブへの参加をお願いした。

ダワーさんのお宅では、驚くべき改良がさまざまなかたちでなされていた。まずは車の廃ガラスを使って温室がつくられていた。また、苗床が用意され、大根やニンジンが植えられていた(ただし、これらは移植には向かない野菜であることを説明しなければならなかった)。また、植えられた樹木にコンスタントに水をやるために、ペットボトルを利用した給水装置もつくられていた。家の中で、今年の野菜栽培とクラブへの参加をお願いした。前回お渡ししたミニ・トマトの栽培バックは、説明書が行き渡っていなかったようで、うまく栽培されておらず、清水さんが丁寧に説明をされた。

バーサンツェレンさんのお宅では、しっかりと畑に畝をたて、軍人である旦那さんや子どもさんたちが交替で水まきなどの作業をしていた。今年の野菜栽培とクラブへの参加をお願いした。どれも歓迎していただいた。ニンジンやタマネギ、キュウリ、ピーマンでつくったサラダと包子をご馳走になった。『おいしいサラダ』という冊子を拝見した(われわれものに書店で購入した)。

ダミディンドノイさんのお宅では、旦那さんと娘さんが対応してくださった。今年の野菜栽培とクラブへの参加をお願いした。当初は、新たな野菜づくりに旦那さんが難色を示されていたが、娘さんはこちらの差し出した様々な野菜についてとても興味を示してくださった。他のお宅でもそうだが、ここでも種芋の植え付け方についてのレクチャーは、とりわけ興味深そうに聴いていた。

遅い昼食の後、もう一度 SOS に行き、コスモスと朝顔の種をお渡しした。すでに彼等もコスモスの種を持っていたが、とにかく子どもたちと取り組んでみると言って下さった。

■5月4日:バガノール区での植林事業訪問

午前9時発で、ウランバートル市の東方約120キロの位置にあるバガノール区へ赴く。かつてスレンの指導教官であった佐々木一郎教授(横浜国立大学/政治学)が現地で取り組んでおられる植林事業と、とりわけその組織母体となっている NGO の活動について学ぶためである。

3分の2ほどの距離を行ったところで車が故障し走行不能となる。幸い、近くの村に住む、運転手のバイルさんの義理の父上が車を出して下さって事なきを得た。

バガノールでは Baigaichimeg Associationy という、現地の学校の建物内に本部をおき同校のエコロジー教育推進ならびに植林事業の拠点となっている団体をお訪ねした。代表の Baigalmaa さんは、もともと同校のモンゴル語の教師であったというが、一念発起してこの活動を始められ、現在は教員としての身分を保有したままこの組織の代表として、テキストの編集等の仕事にあたっているという。

佐々木教授からは、2000 年以降のモンゴルにおけるその活動の概要を伺った。技術指導よりも、むしろ大事なのはマネージメント能力をいかに高めるかにある、ということと同先生は力説され、若手スタッフ育成の必要性を強調された。その後、植林のための育苗等が行われている同校の温室を見せていただいた。革命のあった 1992 年以前には、こうした温室がどの学校にでもあった、ということである。いくつか資料を頂戴した。

次に、ホロー議会議長の Sukhbaatar 氏に紹介していただいた、Munkhtugus 氏(Altai Vegetables)の食品加工場を訪問した。この工場では、仕事のない退職者等に野菜栽培をしてもらい、その生産物を買って酢漬け等の加工品にしている。最大 1 ha から最小で 600 m² 程度まで、様々な規模の 550 軒ほどの家庭に協力してもらっているという。

■5月5日:第53学校で打合せ・科学アカデミー訪問・ホロー長訪問

午前9時までに第53学校をお伺いし、タンガード先生との間でいくつかの調整及び確認作業を行った。同校に残してきた種子は以下の通りである。春菊(16)、カブ(20)、ターサイ(29)、ネギ(8)、ニンジン(4)、ダイコン(13)、ハクサイ(1)。また本として、調理関係の本を5冊、栽培関係の本を2冊置いてきた。野菜クラブは、今月13日及び14日にもう一度全体会をもち、話し合い等を行うことになった。その際(こちらが提案した)ダワーさんのお宅の訪問もやりたい、ということであった。また、(7月訪問の可能性についていろいろ調整したが)7月20日ごろまでならば何とかかなと思う、ということであった。

午前10時半に科学アカデミー植物学研究室の Dugarjav 教授を訪ね、土壌分析の結果の読み方について質問を行った。Dugarjav 教授は、自分は土壌の専門家ではなく、これは若い研究者に依頼してやってもらったものなので、詳しい内容とその意味するところについては早急に問い合わせ、スレンのほうに1週間以内に回答したい、とお答えになった。また、ここ数十年の

間のウランバートル周辺地域の植生変化について質問を行ったところ、30年間で30%の森林が失われたことなど、概況を説明してくださった。また、ウランバートル市の都市計画についての見方などについても、あわせて質問を行い、議論をかわした。

午後1時過ぎに新ホロー長を再訪し、意見交換を行った。アタルさんが提案された一列に並んだ10軒程度の家の緑化の可能性については、今後検討していきたい、ということであった。また、24ホローの環境政策やコミュニティ政策についても見解を伺い、意見を交わした。

第2回モンゴル訪問記録:2009.7.18. – 7.22.

安藤聡彦

■7月19日:野菜クラブの研修・質問会

当初は12～13組の参加が予定されていたが、一昨日(17日)の大雨のためや、日曜日ということもあり、結局それほど集まらず8組の参加にとどまった(うち一組は集合に間に合わず。第53学校に集合しダワードルジさん宅へ、車3台で移動した。

到着後、全員で温室の畑から栽培状況を見せてもらう。温室内は、一昨日(7月17日)に降った大雨のため、高さ20cm近く水位が上がって水に浸かったとのこと。温室内ではきゅうり、トマト、ネギ、カブが植えられていたが一部水がかぶった形跡が見られた。ダワードルジさんの奥さんは泥のかきだし作業を行っていた。

奥さんによると路地で育てたカブはもうダメとのこと。見学の最中から野菜クラブの参加者から感想や質問が頻発する。全体的にどのように栽培しているのかを温室内から外に植わっている野菜を見ながら移動するが、そのつど気づいたことや疑問についてダワードルジさんのお奥さんに聞いている。

花壇では花も栽培しており野菜よりも関心が集まる。家の中の栽培状況についても見せてもらうが、家の中の栽培のほとんどは花。値段や栽培方法についての質問がだいたい出る。野菜や花についてもそうだが、建てられた家についても関心が強くいろいろと質問が出ていた。

車座になって全体で聞きたいことを共有するという雰囲気よりも、一人一人質問しその場で知りたいことを聞くような形であった。現場を見ながら気づいた点を聞けるということでは良かったが、全体的な技術の共有には、必ずしもなっていなかった。また、野菜クラブの人たちは、野菜の栽培についてよりも、花に関する関心が途中から強くなっていった。花の種の入手方法や栽培方法などについて積極的に質問が出ており、花を購入して帰る人もいた。

■7月19日:第53学校訪問

アルタントヤ先生、学校の用務員さんと一緒に学校菜園を見せてもらう。敷地内に入ると8本程度、松が植えられていた。高校生らが卒業の際に記念に植えたとのことである。

学校菜園は5m×6mに10畝×11株のじゃがいもを植えているほか、3m×6mの広さを3区画に区切り、タアサイ、春菊、大根、もう一つの同様の区画にネギ、ニンジン、カブを栽培している。また、学校の建物側にコスモスなどタイヤを利用した花壇が3つ、少し無防備な形でひまわりが植わっている。じゃがいも等はよく育っており、春菊、ニンジンの生育状況はほかのものに比べて遅い。タアサイは花が咲きすでに食べごろを迎えていた。しかし、食べ方がわからないとアルタントヤ先生はおっしゃっていた。

夏休み中の畑の管理は用務員さんが交代で行っている。植え付け当時はトラック2台で黒土を運びいれ、ブーツ(家畜乾燥糞)を混ぜたものを入れた。2週間ぐらい混ぜたものを何度か耕し、その後植え付けをした。今秋に野菜を収穫したら残っている土を入れるなどし、改めて土づくりをして来年に備えたいとのこと。学校菜園には柵ができていた。前回の視察時に盗まれないか等の懸案事項が出ていたため、視察の2週間後には柵を取り付けたとのこと。フェンスができていし盗まれる心配はとりあえずないと言っていた。

生徒は6年生から10年生が、土を耕したり雑草や石を取ったりする作業をしている。収穫もする予定。また、収穫物は出来れば食堂で使っていきたいとのこと。水は雨が降っているときはあげないが、晴れが続いているときはホースで上げたり、汲んできた水をしばらくおいて温めたりしてから使っている。来年は出来れば畑をもう少し広げ温室なども作りたいとのこと。

野菜がだいたい育っており、土づくりについてもしっかり黒土とブーツを混ぜて作っている。土の課題、技術的な問題もまだまだ多い様子だが、来年度以降の意気込みをきいている限りは、栽培技術について指導がされることで、技術的な面での問題は改善していくのではないだろうか。土づくり

は継続的にしていくとのことだが、土の様子を見るとやはり石やガラスが多い。水の問題は雨とホースで撒く分で賄えている様子。花の摘芯、摘花の作業がされたりもしている。

その他、栽培技術に関しては、じゃがいもの畝が細いので、土寄せがもっとできてほうがよいと思われた。また、ごくわずかだが葉枯も見られ、今後のナス科の連作や病気等が心配である。カブは密植しすぎており、植え付け方の指導はないようであり、間引きなどの作業をする必要がある。その他の葉物や根菜類に関しても密植の傾向が強く、畝を作る、条蒔きにする等が必要と思われる。

会食時、アルタントヤ先生に来年度の計画や現状について伺う。来年はフェンス内を学校菜園として使うという当初の目的通り、場所を拡張して温室も作ってやりたいとのことである。学校内の位置づけとしても正式には決まっていないが、7年生から植物学の中で栽培を位置づけ、もっと畑が広げて、7年生だけでなく9年生、6年生、10年生まで学年を広げられるようにしたいとのこと。また、授業について植生等について扱い、知識をつけてから実習として畑で栽培をやりたい。また、野菜を管理するクラブを作り、クラブ活動で夏でも野菜を管理しに来られるようにしたいとのこと

周囲の学校で類似した実践があるか伺うと、少ないがあるということで、近くでは第68学校が韓国の団体が温室を作って子供たちに教えているということである。そこでは、秋に子供があつまったときか春に、子供たちに授業をやっているとのことである。

活動をするためにはアドバイスが必要かとの質問に、専門家か経験のある人が学校や畑に来て指導してほしい。例えば、科学アカデミーの人や私立の農大なんか専門レベルが高いらしくそういう人たちにいろいろ聞きたいとのことである。

子どもたちは学校菜園に大変関心があるという。ゲルの子供たちが多く、家の中で栽培している家もあり、仕事したいと思う子も多いが、6年生は教室の掃除にはこなくても、畑の掃除には喜んでやりにくし、みんなでやるということも彼らには楽しいらしく、別のクラスの子とも仲良くなったりしている。子どもたちの意識も変わってきており、環境も守っていかないといけないという意識もでてきている。以前は日本のプロジェクトで木を植えるなどしていたとき、植えた木を蹴ってしまった子もいたが、今は少しずつ変わっていつているという印象があるとのことである。前は花を見ていいなと思う子どもたちが少なかったが、今は花を見てすごいと感動したりする子もいる。授業としても、普通の科目の中でも環境について少し扱ったりしている。

次に来た時も高校での交流をしたいし、また、アルタントヤ先生を年末に日本で予定しているシンポジウムへ呼びたい、とお願いすると、シンポジウムについての件は校長先生らと話さなければならぬが、行けるならそれはとてもうれしいとおっしゃっていた。アルタントヤ先生はウランバートル出身だが、北部のロシア国境近くに子どもころ住んでいたことがあり、野菜を育てて様子を見ていた経験がある。

■7月20日：野菜クラブ協力世帯訪問

●No.21 オトゴンツェツェグさん(COC孤児院寮母)

テギシマーさんと一緒に対応して頂く。カブ、じゃがいも、ニンジン、春菊、大根、ネギのほか自分たちで買い足した種で別の野菜も育てている。孤児院内のあいたスペースで6m×10m程度の畑で栽培。比較的広めに作っている印象を持つ。もともと孤児院内の土が良いためか、全般的に野菜はよく育っている。区画や畝なども丁寧に作られている。じゃがいもも土が少し寄せられていたが、雨で流れてしまったとのこと。水は水道から直接ホースで温めずに与えている。春菊、タアサイは花が咲いてしまっている。収穫時期はどうするのか聞くと、もう少ししてからとのこと。あまり馴染みのない野菜のため収穫時期に関する情報も必要な様子である。昨年からジャガイモを作り始めている程度の栽培経験しかない。しかし、今年も半分程度同じ場所でじゃがいもを栽培しているため、別の区画に植えたジャガイモと比較して育ちが悪く、連作障害のようなものがでている様子である。

植え付け、土を耕す、雑草を抜き、水やり等の作業を寮の子どもたち10人ほどと一緒にやっており、子どもたちも楽しんで世話をしているとのことだが、お金の問題もあり、肥料など土づくりに力が入られていなかった。収穫した野菜は自分たちで食べる予定である。葉物野菜はサラダにし、大根はジュースにしたいとのことである。なぜ畑を始めたのかについては、自分たちで作れば安全。子どもたちと一緒に作業できることもいいことです、とおっしゃっていた。種を配られた際の手紙への記入は、2回程度してその後していない。

●No.3 テギシマーさん(COC孤児院寮母)

オトゴンツェツェグさんと一緒に対応して頂く。じゃがいものほか、果樹や花なども植えている。孤児院内にあいたスペースで4m×12m程度の畑で栽培をしている。もともと孤児院内の土が良いため

か、じゃがいもはよく育っている。植え付ける際にとても深く耕して植えたとのこと。植え方、栽培方法にはまだ不安がある様子である。デジマーさんは一昨年から畑を作っている。昨年作っていたネギは冬超えをしていた。ただ、今年は他の野菜の植え付け時期に入院をしてしまったため、植え付けられなかった。来年はトマト、キュウリなども作りたいとのことである。水は水道から直接ホースで温めずに与えている。雑草取り、水やり等の作業を寮の子どもたち10人で一緒に行っており、子どもたちも興味を持って作業をしているということであった。

No.6 バトオチルさん

元農放牧研究所の獣医をされていた方である。仕事をしているときは同僚と野菜、果樹の栽培などもしていたことがあるという。現在は年金生活で、家から離れ子どもたちと学校の近くに移り住んでいるため、畑に関しては家を貸した知人に任せていた。戻ってくると犬などに荒らされたためか、雨で流れてしまったためか、畑にはほとんど何も残っていなかった。

10年前に掘った2mほどの井戸を持っているが、野菜に水をあげ乾燥すると土壌表面が白くなる。2年前、ジャガイモなどを作っているときは黒土やブーツなどを入れて栽培していた。来年は人に任せないで、水も土もあるので自分で栽培しないとためだと話していた。また、井戸もあり、経験もあるので、あとは、作業が主人と自分だけなので、手伝う人、指導してくれる人がほしいと言っていた。

●No.1 アルタンチメグさん

ここでは、じゃがいも、人参、タアサイ、カブ、白菜を作っている。また、果樹も数本育てている。比較的広く畑を作っているが、春の寒さと雨で半分程度の野菜が駄目になってしまったとのことである。他の野菜はあまり育っていない。じゃがいもは比較的良好。1m×2mほどの小さな温室を持っているが、中で育てているキュウリはあまり大きくない。作業の道具についてうかがうと特に道具は使っているわけではなく、鉄の棒で少し土を砕く程度とのことである。

引っ越してきてから3年目で、栽培は今年が初めてである。黒土を入れ、腐葉土のようないろいろ要素が入った肥料を購入し畑に入れている。水の問題が大きく、水汲み場まで手押し車で運ばなければならない。水は2日に1回程度。作業は子どもたちと奥さんが行っている。作業としてじゃがいもの芽かきがされている。指導する人がいるかと聞くと、一度ご主人の友人で栽培経験のある人から聞いたとのことである。

現在家を建設中で、完成したらゲルを片付け、畑を広げ大きなハウスを建てる予定。なぜ、野菜を育てようと思ったのか聞くと、モンゴル産は安全でいい、ご主人も仕事柄よく食べるので野菜を食べさせたい、また、子どもたちを安全のため外でなかなか遊ばせてあげられず運動不足になっており、運動のためにも畑作業はいいから、とのことである。野菜は普段も農場まで行って直売所のようなところで買ったりもしている。白菜がうまくできたらキムチを作りたいと言っていた。少し高台に家があるため、水の確保や土壌の問題が大きいと思われる。記入シートにはしっかり記入がされていた。

●No.19 ビャンバジャブさん

カブ、ネギ、人参、じゃがいもを4m×5mほどの畑で栽培している。ネギはタライのようなもので栽培。整地する際に削れた硬い岩盤のような部分が見えるほど、地面のすぐ下は堅い岩のような状態である。始め黒い土を入れ、近所のアルタンチメグさんと一緒に植え付けを行ったという。土壌が悪いせいか全体的に生育状況も悪い。栽培は今年が初めて。土には燃料の木くずなども入れている。水は水汲み場から汲んできて2日に1回程度やっている。水の問題で困っており、また植え付ける際に指導してくれる人もほしいということである。収穫できたら自分たちで食べる予定である。ウランバートル市内は野菜が高く、中国産もおしくなく危ないと考えているので、自分たちで作ったほうが安く安全であると認識している。子どももよく手伝っている様子で、畑作業に興味を持っており収穫を楽しみにしていた。土壌と水の問題が大きな障害となっていることが分かる。記入シートは書いていないとのことであった。

●No.40 ドラムスレンさん

ビャンバジャブさん宅の隣にお住まいだが、ご両親は留守であったため、子どもが対応してくれた。畑だけ見せてもらう。少し大きめの温室があり、区画がしっかりとしており、本格的な印象を受ける。じゃがいも、キャベツ、人参、カブ、ハウス内でトマトを栽培している。畑も広い(12×10mほど)。果樹を作っている様子も見られる。土はそれほどいいという印象は受けませんが、区画もきれいに作られ栽培技術がある程度持っている印象を受ける。

●No.39 ムンフツェツェグさん

もらった種を2年前に植えた果樹の周辺に種をばらまいた。その後黒土を入れてしまうなどしたため、現在は発芽した様子は見られない。ネギが数本出ている状況である。雑草がよく茂っている。水は水汲み場に取りに行く。水は雨水を集めるような仕組みも作っている。夫婦で仕事をしているため作業はあまり出来ない。また、敷地も狭いため来年はジャガイモのように場所を取るのではなく、トマト、キャベツなどを栽培したいとのことである。来年は頑張りたいと言っていた。ご主人は建築関係の仕事をしている。

●No.18 トウシュンジャルガドさん(ダワードルジさんの息子)

トウシュンジャルガドさんは、結婚して町の中心部近くに家を買ってもらい、現在改装中の家に住んでいる。すでに家の中で大量の多種花卉の栽培をおこなって生計を立てている。他の仕事はしていない。野菜は花壇でトマト、ピーマンだけ作っていた。いずれ家の暖房設備に付属させブロックを基礎にした温室を作り、そこで野菜を作りたいとのことである。

栽培技術を見ていると、挿し木で増やす技術を持っており、実家のダワードルジさん宅同様、花の栽培技術が高い印象を受ける。栽培期間中は月に一度中国に買い出しに出かけ、保湿用キューブや安い花の種を買ってきている。栽培している花は小さくて2,000~3,000Tg。大きいもので30,000Tgのものもある。定期的に家まで買いに来る客や、電話で問い合わせがあるなど花卉の顧客がおり、それ以外は花屋に出荷しているという。室内を使ったモンゴル型花卉農家、植木農家といった感じであった。

●No.28 ウンダラフビレグさん

郊外に住んでおり、住まいの敷地が広く畑も大きい。大きな温室を持っている。今年はジャガイモと温室内できゅうり、トマト、ネギを栽培。ほかのものは、植え付け時に息子が入院していたため植え付けられなかったという。主に奥さんが作業を行っている。じゃがいもも温室内の栽培も順調である。温室内の土にはブーツなどを入れている。じゃがいもは花を摘んでおり、温室内のキュウリは誘引などもされている。栽培は5年目だが、郊外のため水の問題がある。毎日トラックでドラム缶4つに水を汲んできており、経費がかかっている。井戸を掘るのも土地的に難しいとのこと。

中国産ではなくモンゴル産の野菜を食べたいので野菜づくりを始めたという。収穫した野菜は自分たちで食べている。作りたい野菜はトマト、キュウリ、じゃがいも、赤カブ、人参、白菜である。また、知り合いから聞いた虫が出ないもの(薬?)も使ってみたいとのこと。非常に栽培に意欲的。

ご主人は、奥さんがハウス内で作業すると汗をたくさんかき、肌にいいこともあるので栽培をやっているよと笑いながらおっしゃっていた。

●有機野菜の栽培をする片桐さんの農園訪問

昨日JICA海外青年協力隊員の玉井さん、坂口さんから聞いていた片桐さんの経営するレストラン「森のイルカ」で昼食を取る。野菜サラダはみずみずしい。別の店で食べたカブにはすが入っていたが、このレストランではキュウリなど乾燥せず保水している状態で出てくる。店員より片桐さんは温室に在るとの情報から、片桐さんに連絡を入れ、見学のアポイントメントをとる。

昼食後ガチルタで有機農業を営む片桐さんを訪ねる。片桐さんは群馬の渋川にある北日本フーズの社長で、2001年からモンゴルに入り、Green CityのRichard Normanとの関係から12年前に作られたハウス農場で、3年前から3~4棟を借りて有機栽培をおこなっている。ハウス内は3毛作だが、暖房設備は特に使わず4月中旬から11月ぐらいまで栽培をしているという。

多品種を生育の状況に合わせて蒔いていく多品種の混栽を行っている。連作障害を防ぐため輪作も行っている。ほぼすべての種を日本から持ち込み、日本産の野菜を栽培している。じゃがいも、ニンジンを作らないが、ほとんどの野菜の栽培に成功している。ハウス内をざっと見ただけでも、きゅうり、ごぼう、青紫蘇、ゴーヤ、トウモロコシなど種類は非常に豊富である。露地が5月の寒さでやられて駄目になってしまっているが、ハウス内の生育は見事の一言に尽きる。土壌は鶏糞を入れている。10年の成果か、ミズがいるほど土壌が肥えている。

「森のイルカ」のレストラン経営も行っているが、現在の場所(韓国大使館向かい)は撤退し、別の場所で改めてオープンするとのことである。また、日本食材についても豆腐、こんにゃくなど材料は日本から取り寄せてモンゴルで作っている。食品加工業の許可も取っており、ハンバーグ等の食品加工品をスーパーなどに出していたが、商品がぐじゃぐじゃにされる等なかなかうまくいっていないということであった。

■7月21日:野菜クラブ協力世帯および先駆世帯訪問

●No.34 ガントムルさん(第53学校数学教師)

今年はねぎだけを栽培している。土地が狭いため、1.5m×3m程度の花壇で栽培している。すぐ芽が出てくると聞いていたネギを選んで種をもらい植えた。洗濯用の4mの井戸があり水には困らない。水やりは水を温めてから2日に一回程度である。花壇に黒土と普通の土(砂)を混ぜたものを厚さ5cm程度入れていたが、大雨でだいぶ流されてしまった。6月に植えたためか、ネギもあまり育っていない。雨でも流されてしまったという。17日の大雨で水位が40cm近くついてしまっていた。来年はダワードルジさん宅で見たような温室を作りトマト・キュウリを作りたいとのこと。栽培方法の紙をもらっていなかったため、自分で考えて植え付けた。子どもたちは男の子ばかり大きくなって手伝っておらず、ガントムルさんが今のところ一人で栽培している。

●No.30 バトアムガランさん

両親不在のため、娘さんが対応してくださる。娘さんもたまに水やりをする程度で、畑に関してあまり情報は聞けなかった。畑は広めでじゃがいも、ねぎ、ほうれん草を栽培していた。じゃがいも、ネギはよく育っている。ほうれん草もよく育っているが、収穫期を過ぎて花が咲いている状態である。フェンス沿いに花を植えたとのことだが発芽した様子はなかった。

●No.29 ダワードルジさん宅

研修会后、翌々日改めて尋ねると両親は不在で、トウシェさんの弟が対応してくださった。畑を見せてもらおうと、ハウス内できゅうり、トマト、赤カブを育てていた。トマトは別品種も育てている。キュウリは誘引がされている。外に植えていたネギは無事だが、ニンジン、カブが被害を受けていた。露地で他にもキャベツ、果樹を育てている。多くの世帯で同じ品種の果樹を育てている。あまり情報は聞けなかった。植え替えをされたネギなのか、ネギ坊主ができています。種子をとるためかは不明であった。

●No.31 ダワーさん宅

お訪ねした時は不在だったため、中で畑だけ見せてもらっていたが、その後奥さんが帰宅し、話をうかがうことができた。畑は去年の2倍近くに広がり、じゃがいもを多く育てている。土はブーツを入れているようで、特にハウス内の土は良い状態である。握ると固まる黒土になっている。ハウス内ではきゅうり、赤カブ、ミニトマトを作っている。キュウリがハウス内を覆うように伸びており、誘引もしっかりされている。鉢でネギ、露地でジャガイモも栽培している。以前は小さなビニールハウスがあった区画でタアサイ、ほうれん草なども育てている。タアサイ、ほうれん草は花が咲いている。特にほうれん草は生育状況が悪く、土壌分が悪いためか非常に小さく色も黄色い。果樹を育てている場所では、鳥よけにビニールをつけておく等、そのほかにも様々な営農の工夫がみられる。屋根から雨水をためる工夫もできている。非常にハウス内の土がよい印象があり、よく聞くと鳥の糞を水で溶いたものなどもいれているとのこと。

●No.32 パーサンツェレンさん宅

奥さんに対応していただく。じゃがいも、カブ、ニンジンも植え付けるもじゃがいものみの発芽している。土は特に何もいれずそのままにしてある。忙しくてブーツなども入れられていないとのことである。水は2日に1回程度。土の状態のためかじゃがいもは生育状況があまり良くなく小さめで、数本に葉枯れが見られた。花が咲くと取っている。他に朝顔とひまわりを植えたがひまわりだけの発芽した。大雨によって20cm近く水が流れ込んだとのこと。じゃがいもには土寄せがされていたが、流されてしまった。作業は奥さんのみが行っている。ネギの植え付けができておらず、今植えても平気かとの質問が出る。昨年に比べて手入れ作業もできるようになってきたという。来年はみんな食べられる物をつくりたいニンジン、じゃがいも、ねぎ、カブを育てたいとのことである。出来れば花も観賞用に作りたいとおっしゃっていた。家の中に招いてもらいボーズとコーヒーをごちそうになる。室内でミニトマトを鉢で育てていた。

●No.33 ダムディンドノイさん

奥さんに対応していただいた。じゃがいもと春菊を植える。1m×1m程度の畑で6月に植えた春菊は、植え付けた際の穴が指の先から付け根ほどの深さで植えたという。春菊の発芽は見られない。別区画でおおよそ11m×2m程度の広さでじゃがいもを栽培している。種芋を植え付ける際、半分に切ったものと、さらに半分に切ったものの半々で植え付けており、生育状況に差が出ている。昨年作った場

所でじゃがいもを作っているが、新しく土を入れる等の工夫を行っている。じゃがいもの生育状況は悪くない。種芋の差以外は特に見られず、比較的よく育っている。

第3回モンゴル訪問記録:2009.9.6. – 9.14.

梶島邦江・清水 昇

■9月7日:第53学校での打合せ

1. 13日の収穫パーティーについて

まず、われわれの航空機の時間変更により、14日15時に変更することになった。今年は野菜栽培に関してのグループディスカッションを行った後、18時くらいからパーティーを行うことを提案した。主目的は今年一年の反省などを話し合うことである。パーティー当日は平日なので食堂が使えるとのことであるが、野菜クラブの方たちにも自分たちの作った料理を一品作ってきてもらうよう、お願いした。われわれは野菜の天ぷらを作ることにした。

2. 日本の学校との交流実験について

日本の学校とインターネットを利用して通信を行いたい、いまだに先方のインターネット環境が整わない。埼玉のいずみ高校との交流実験は安藤先生からの連絡待ちである旨をお伝えし、9月9日には何とかできるようにしたいとお伝えした。

3. 栽培教育の成果

今年の栽培教育は、10年生の3クラスに対し、最初は土地を選ぶこと、二番目は牛フンや黒土をまぜて土地を作ることを教えた。教育は授業時間外でなされ、学生はいったん家に戻って着替えてから集合したりした。参加したのはクラスの全員で、そのうち8名くらいは自分の家の庭にも植えたという。授業は、2週間くらいで全て行われた。子供たちには交代で水をやらせた。6月10日からは夏休みで、その間は守衛が水やりをしたが、野菜の間引きを手伝いに来た子供たちもいた。夏休みについては、子供たちには当番制で曜日を決めて対応したいとのことである。

栽培教育の効果としては、まず、環境が改善されたことがあげられた。しかし、より大きな畑にするならば、多くの人の支援が必要となるため、父兄などの協力してくれるだろうということである。野菜を作るというのは、モンゴルでも初めての試みではないが、一番大事なことは、第53学校が下地をつくり、野菜作りのすそ野を広げていくことであると、学校は考えている。

4. 今後の栽培教育について

400粒程度の計4種類の花の種を日本から持参したので、子供たちがペットボトルを使って教室で花を育ててみることを提案し、その花の特性について、発芽率が高く、4ヶ月程度花の季節が続く、日本やヨーロッパで人気があることなどを説明した。また、花のスケッチを行ったり、花の歌を音楽の時間に歌って植物への親近感を芽生えさせたりするなど、花を教材とした教育の提案をした。

また、今後の学校での栽培教育の展開について展望を話合った。学校としては、中学生と高校生に野菜作りをさせ、小学生に花を育てさせたいということである。そこで、高校生に野菜の売り方などの収穫後のマネジメントをも考えられるような教育プログラムの可能性を提案した。また、活動を学校内部に留めるのではなく、地域の社会も絡めた活動として発展していく、コミュニティスクールという形態の可能性を提案したが、学校側からも賛同が得られた。

第53学校としてはキュウリやトマトの栽培を希望しているが、それは商品価値が高いからで、子どもたちに栽培方法を覚えさせ、家庭でも栽培できるようになることを目指している。われわれから見れば、モンゴルは夏が短いので、発芽から苗までのプロセスを温室で行えるなら学校にも地域社会にもプラスになるため、学校でハウス栽培をすることが重要であると考えているということを伝える。その上で、学校側はプロジェクトのたたき台を作ることにした。

社会主義時代には学校には温室が必ずあったという話をわれわれは聞いていたが、校長の話では、実はそうした学校はそれほど多くはなく、また、温室を持っていたりも利用していない学校もあるということである。教育長がそんな学校に、温室を第53学校に回してくれないかと書いてみってくれたが、どこにも断られてしまったそうだ。

5. 野菜クラブについて

今年は30世帯が野菜クラブメンバーとして野菜作りを行いカブと人参がよく育ち大体80%ほどのできであるということであった。この間、7月に15世帯ほどを見て回り、ダワードルジさん宅にみんなで見学を訪れた。その後、2回ほど、ダワーさんやダワードルジさんに学校に来ていただき、野菜を作っている家庭を招いて栽培指導をしてもらい、静かに水をやる方法などを聞いたということである。

家庭菜園実施家庭の訪問は、野菜クラブの方達にとっては水やりの仕方や温室の実際などを見るいい機会になったようであり、今後に向けた家庭菜園の展開に良い刺激となったようである。また、ペットボトルを使った節水は、実際に試してみた家庭もあったようである。7月20日には、野菜作りに興味を持っている子供や大人を学校の裏に集めて、ドラム缶で水を引いて野菜を植え、栽培技術を学んでもらったが、質問も多くなされていた。

野菜クラブで作った5人ずつのグループは、ひと組が3人ずつくらいになってしまったり、5人がかたまってしまったりしてしまっただけでなく、また、夏になると学生も家族もみんな休みで地方にいてしまうので、野菜クラブのメンバー同士でも会う機会がなくなってしまうという問題が学校側から指摘された。また、野菜を作り始めても、慣れている人も慣れていない人もいるのでばらつきがあったということである。モンゴル社会では、教えを請われれば教えるが、自ら進んで助けることはしないということである。しかし、年配の人の方がそのような助け合いを進めることは期待でき、野菜づくりも若い人は忙しく働いているので、年配の人ががんばって取り組めると良いと思うとのことであった。

野菜クラブをこれから広げていくに当たって、学校からは少し独立した組織にしていくということは、今後の課題として提起された。

6. 国際シンポジウムについて

年末12月に日本で開催予定のシンポジウムへの、学校からの(校長が環境教育を担当している先生の)参加を要請した。また学校からは、将来うまく栽培教育や野菜クラブとの連携が進んでいけば、モンゴルでシンポジウムを開き、多くのモンゴルの教育関係者や市民に学校菜園をみてもらったり、地域の菜園を見てもらったりしながら、活動を広くモンゴル国内に紹介していくこともできると良いだろうという展望も示された。

■9月9日:第53学校での打合せ

1. 花栽培について

小学生の教育課程に花の栽培を、2・3年生には「人間と環境」の授業の一環として、3・4年生には「自然学」の授業の一環として取り入れたいという、第53学校の希望に関して、その技術的側面について意見の交換を行った。学校側としては、花の栽培を通じて、作る技術を学び、自分で育てたものを大切にすることを学び、環境の大切さを学ぶことを重視している。そして小学生から、自分が植えた種から苗を育て、それらを家庭などに持ち帰り、地域の環境の美化などにつながればという方向性を考えており、将来的には室内での花の栽培だけではなく、裏の野菜畑でひまわりを育てたりするなど、広げていけることを望んでいる。今の教科書にも花栽培については載っているが、いままで教えたことはなかったので、花の栽培教育を実践できることを喜んでいるということであった。

なお、栽培教育を行っている日本の学校とのスカイプ会議であるが、日本側の準備が整わず、結局断念せざるを得なくなった。

3. パーティーについて

14日に予定しているパーティーでは、先生たちも学校で作った野菜をそれを使って何か作りたいと思っているということだったので、野菜クラブではない先生がたもお呼びすることとなった。また、実際の段取りについて打合せを行った。

4. 野菜クラブの活動について

われわれとしては、将来は野菜クラブのコアメンバーから若い人々を選んで運営を任せたいという希望を伝えると、校長からは野菜クラブのメンバーの、一人の母親が意欲を持っており、自分でも独自に地方で野菜栽培を行っているという紹介があった。また、コアメンバーの中には学校の先生や、環境学などの先生が入ってくださることを希望すると、その点は検討中とのことであった。

5. 温室について

学校側から温室の意義として、次の点が上げられた。まず、子供たちの家庭では温室を作れる家庭もあるが作れない家庭もあるので、学校でこそできる環境として温室を利用し、温室の中でなければできない野菜を栽培することができる、という点である。子どもたちの70%はゲル地区の子供たちであり、こうした経済的に恵まれていない子供たちが日常食べているジャガイモのような野菜以外の、トマトなどを給食で提供することは栄養面でも意義が高い。また、この学校の特色として、1日3食もおぼつかない子供たちのために、温室を使って野菜給食を提供したい。ちゃんとした温室をもち、路地栽培も並行して行っている学校はまだないので、それらを成功させて、今後のモデルケースとなるようにしたい。

こうした学校の希望に対して、われわれからは、実った野菜を学校の中のみで消費するのではなく、地域に提供するという広がりをもった流れを作っていくことを希望し、そのために1年を通した利用計画を考えて欲しい旨を伝えた。冬の光熱費を考えると温室は維持費の負担がかかるが、また、一年中温室を稼働させれば、ランなど商品価値の高い花を栽培できることも、提案した。温室の予算については、改めて調べることとなった。

最後に、収穫した野菜を販売する売店を学校で運営する可能性について意見を交換した。校長によれば、地方では、学校が家畜を持ってその家畜で学校を運営する例もあるので、学校が売店を持つことは不可能ではなく、むしろ、この地域には野菜だけの店というはないので、逆に売店として成立するのではないかいということである。また、高校生に売店運営を任せることによる職業訓練用のカリキュラムの可能性もわれわれから提案した。

■9月9日：第24ホロー長訪問・コアメンバー候補との会合

●第24ホロー長訪問

まず始めに、14日のパーティーへのホロー長をご招待した。その上で、われわれの活動について説明したところ、「野菜づくりは小さなことかもしれませんが、将来的に役に立つかもしれないので、私も協力したいと思います。」とのご返事を頂いた。

こうした活動をするためにホロー内で共有スペースを確保するには、ホロー長が区に提案し、区から国家土地委員会に提出して最終的な判断を仰ぐことになるという。そして、まだ最終的な決定ではないが、7つのヒセグの一つに子供の遊び場を作りたいと思っているので、それが認可されれば、一部で野菜作りに使えるということである。

●野菜クラブコアメンバー候補との会合

野菜クラブのコアメンバーとしてふさわしいだろうと思われる地域住民お二人と、意見の交換を行った。まずわれわれは、野菜を作るということで、ゲル地区の人と人との関係を築き再構成していくということを目的としていること、コミュニティの力と言うものを再編成して住環境を改善していきたいと考えていることを伝え、あわせて、このプロジェクトが作った野菜を食べて食生活を改善したり、野菜の販売による経済生活の安定も視野にいれていることを説明し、その実現に伴う問題点を列挙した。そして、われわれだけではこのプロジェクトは実現しないので、住民の方から意見を行っていただき手伝ってくれる人が必要であることをお伝えした。

まず、野菜栽培には土地条件の悪いゲル地区にこだわる理由について説明を求められた。これに対し、われわれはゲル地区の住環境の改善を目指しており、地域の共用空間ができるような発展を目指していること説明した。また、木を植えるというオプションについては、その栽培が技術的に難しいということと、野菜を食べるという行為による栽培へのモチベーションの維持を重視していることを説明した。そして、このプロジェクトを実現するためには野菜クラブの人々の支援が不可欠であるが、それには野菜クラブの中心にコアメンバーが必要であり、それをこの2人にお願いできないか、こうした形で野菜クラブは運営して行けるのかどうか、意見を伺った。

野菜の販売については、夏ではどこでも収穫をしているからあまり売れず、冬は倉庫などでの保管が必要になるという指摘をいただいた。また野菜を瓶詰するという案も提起された。他方で、トマトは苗だけでも売れる可能性があることも指摘された。また、野菜の販売に関しては、店の中で自分たちのコーナーを作り、自分たちで売るといような店が既にあることが紹介された。苗や花を売っているところは大体そうっており、

苗を作る人はそこに苗を置いて、温室の持ち主が買いに行くということであり、キュウリの苗1本で500Tgくらいだという。また、モンゴルでは健康意識が高まっているので、ベジレストランの可能性も考えられるという。ゲル地区では値段を高く設定することは出来ないが、将来はメンバーの集まりやすい場所で野菜や花やフルーツの木などで景観の良い場所を作りたいということである。

■9月14日：JICAモンゴル事務所訪問

第53学校が望んでいる青年海外協力隊の派遣については、まず、しっかりとした理論づけが必要という指摘を受ける。われわれとしては、ESDの観点を持った学校での栽培教育の協力隊員を想定し、53学校では人間と環境、自然学について栽培教育を行うつもりだが、学校内での活動にだけ目が向いてしまうので、地域環境を含めた教育、さらには地域との関係性を重視したコミュニティスクール作りに取り組むための視点を持った人材を必要としている旨を伝える。

ただし、協力隊員要請については、すでに申請を締め切ったので、次回に回さなくてはならないという。また、業務については、53学校単体での活動であれば、いくつかの授業コマを担当できる教員を求めることになり、これには現職の教員などが当たることになる。地域での活動であれば、集落活動支援の枠もあるが、これはもっと空間スケールが広くないと無理。これで申請するとすると、バヤンブルフ区にあるNGOなどに参加してもらうことになり、NGOに所属するか、ホローに所属して地域の活動を支援することになると指摘される。教員なら理数科教師で、野菜クラブの事業・活動を支援する人ということになる。また野菜クラブもある程度立ち上がっていないと、隊員にクラブづくりの活動を全面的に任せるのは不可能であるとのことであった。

■9月15日：ダワーさん宅訪問・第53学校での研修

●ダワーさん宅訪問

ダワーさん宅を訪問し、その栽培状況を次の通り確認した。

・ネギ

細いネギが5つくらいの容器に入れ作られていた。それぞれが小さいので今年蒔いたものかと伺うと、「育ったものは上部をカットして食している。」とのことだった。

・カブ

既に現地にはカブはなかったが、「直径が4～5cmくらいまで成長して食べた。」ということであった。

・春菊

やや水不足気味な状態であったが、花が咲いている。花殻を指して「どれが種なのか。」との質問があり、枯れた花殻を揉んで種を確認していただき、これを保存しておいて、来年の春に蒔くよう伝えた。春菊も油炒めで良く食したとのことであった。また、食べる部位について、「葉のみをたべるのか。それとも若い茎を食べるのか」との質問があり、柔らかい茎と一緒に食べることを伝えた。「日本ではどのようにして食べるのか。」との質問があり、天ぷらやゆでで醤油をかけて食べると伝えた。

・タアサイ

花が咲いて種子のできている状態のものがほとんどで、「これをどのように食べるのか。」との質問がある。種子は食べられないので、これを保存して来年の春に蒔いて、同じように育て葉を食べることを伝えた。一株だけ、葉が青く残っていたカブがあった。このターサイも葉を良く食べたとのことであった。

・種子

春に日本から持って行った種子を蒔いた中で、既に種のみとなっているものについて、「これはないか。」との質問があったが、直ぐには解らないので後で教えると伝えた。

・ジャガイモ

7m×4mの植え付け場所に13kgの種を植えて、70kgを収穫したとのことで、満足そうに話をされていた。

・キャベツ

1株が残っていたが、結球をするような状態ではなかった。その他は、夏の雨でダメになってしまったとのことであった。

・手づくりビニルハウス

ウランバートルは既に秋の気候になっているにもかかわらず、ハウスの中のキュウリとトマトは青々と生育していた。キュウリは収穫し食べたり、親戚などにあげたとのことであった。トマトは、5月に蒔いたとのことであったが、まだ、実が大きいもので2cmで青く収穫はできないようであった。それぞれ、密植で、葉茎も整理されておらず、日照不足の状態となっていたので、「植え付け間

隔を広くすること。」「余分な葉茎は取り除くこと」を実際に現場で伝えてきた。

以上から、ダワさんは工夫を続け少しずつ知識や栽培技術を身につけていることがうかがえた。しかし、こまかな部分でまだまだ、栽培指導が必要であると感じた。このためには、現地での指導員の確保が必要でないだろうか。

●第53学校での「パンジー・ビオラの育て方」研修

小学校の先生23人(1人のみが男性)を対象に、別に作成したマニュアル「パンジー・ビオラの育て方」に基づき、ノミンさんが通訳してパンジーとビオラの育て方の説明後、実際に先生方が用意してあった容器に種子を蒔いてもらった。そして最後に、再度置く場所について注意して終了した。

先生方はそれぞれ思い思いの容器、土を持ち込んでいた。また、容器の底の水抜き穴も空けないで、土を入れて種を蒔こうとしていて、これには少し驚いてしまった。学校での栽培の途中にスレンさんに時間を見つけていただき、確認していくことが必要ではないかと感じた。

第4回モンゴル訪問記録:2009.10.29. – 10.31.

三浦 敦

■10月30日:第53学校での打合せ

1. 学校での栽培教育について

バトゥルジー校長先生は、「私は外部からきたのではなく、もともとこの学校にいたので、この菜園の活動は良く知っており、ぜひともこの活動を今後とも継続して行きたい」とおっしゃった。今年の活動については、7月の大雨のせいで結果はあまり良くなかったが、生徒と生徒の家庭への影響が見られた。授業では、7年生から11年生までの理科の授業のうち、2時間を栽培教育に充てているため、ゲル地区の子どもたちでも最小限の栽培の知識は得ているといえる。昨年の活動の結果、栽培に関心を持つ子どもも増え、中には家でも菜園を始める子どもも出て来た。

授業においては、畑を作ったほか、教室で種から花を栽培もしている。特に今年は創立40周年ということで、40種類の400ほどの種を学校内で鉢に植えて育てている。畑はこれからも拡張して行きたいと考えている。

今年の成果は次の通りである。

土の準備:牛糞(トラック1台分)、黒土(トラック1台分)、鳥糞(3kg)

夏の間は2日おきに水をやった

収穫:ジャガイモ30kg(10m²)、ニンジン10kg(2.25m²)、ダイコン25kg(2.25m²)、
白カブ25kg(2.25m²)、タマネギ5kg(2.25m²)、春菊、
タアサイ(収穫時期を間違えて収穫できず、種だけを取った)

春にはぜひとも温室を作りたいと考えており、子どもたちも楽しみにしているとのことであった(見積もりは、既に梶島先生にお渡ししたとのことであり、だいたい130万Tg位ということであった)。

2. 地域住民との協力について

今年の野菜クラブの活動は、おおむねうまくいったと学校側は考えている。しかし、これからさらに活動を拡大して行くのであれば、ホロとの協力が欠かせないだろうというご意見だった。学校としては、生徒の父兄を通じて住民に働きかけるというのが学校のやり方であり、それ以外のやり方を考えるのであれば、ホロに働きかけなくてはならない、というのが学校側の意見であった。

こうしたご意見は、「学校としてはあまりやりたくない」ということではなく、「われわれとしては住民への働きかけもしてみたいが、学校だけではやりようがない」ということである。実際、いままでホロと学校はほとんど協力関係を持たなかったとのことである。

野菜クラブについては、日本側での話し合いでは、あまり地域を拡散させずにいくつかの地域を選んで集中すべきではないかという意見が出ていたが、それについては、参加してお互いに手伝う人がどれだけ出て来るのか疑問であり、また、場所によっては栽培が困難なところもある。さらに、その選んだ地域の住民全てのやる気を換気するのはむずかしいし、水の問題もある、という指摘がなされた。また、住民同士のコミュニケーションの欠如という問題については、泥棒の問題が大きいので、塀をなくしたり低くしたりすることは不可能だが、「野菜を栽培しています」というような看板を外に建てたりするのがいいのではないか、というようなアイデアが出された。全体として、先生方を議論に巻き込んで行けば、いろいろと面白いアイデアが出て来るように思われた。

学校で出来た種を住民に分けることは、5月末には可能であるが、無償で配布できるかどうかはまだ分からない。通常ならば有償であり、その場合、キャベツは250～300tg、トマトとキュウリは500tgでお分けできるということであった。また、地域住民への巡回指導も可能であるが、ホローのバックアップが不可欠ということである。

もしこうしたホローとの協力関係を作るのであれば、埼玉大学と第53学校と第24ホロとの間で、まず共同の会合を持つ必要があるが、5月では遅い。遅くとも4月の初めまでには会合を開いて共同歩調

を取るべきである、ということであった。また、もしホロ長があまり乗り気でないのであれば、バヤンズルフ区の方から話を持って行くことも必要である。そしてこうした協力関係を築くためには、先生方も積極的な努力したいということであった。

また、最後に、以上のような協力関係を前提として、協力隊員の申請も是非お願いしたいということであった。

3. われわれへの要望

われわれへの要望としては、次の3点が挙げられた。

- ・温室がどうなるのか、早く決めて欲しい(早く作って欲しい)
- ・それほど水を必要としないジャガイモ、赤かぶ、白カブ、長ネギの栽培を進めたい。また、室内栽培用の花の種も、できればもっと欲しい。
- ・栽培のための教科書が欲しい(とアルタントヤ先生はおっしゃったが、アミード先生とタンガード先生は、もうあるから大丈夫だよ、と言われた)。

最後に、屋外の畑、温室用地、および屋内での栽培の様子をみせて頂いた。パンジーもビオラも、問題なく発芽して生育しているようだったが、清水さんからのアドバイスをお伝えしておいた。

4. 12月のシンポジウムについて

バトゥルジー校長は、ぜひとも先生方の研修の機会として、自分ではなく一般教員を日本に派遣したいとおっしゃり、このプロジェクトに最初から関わっているという理由で、アミド先生がおいで下さることになった。

■10月30日：バトナムフ先生との意見交換

今年われわれが依頼して行ってもらった、日本野菜の栽培実験は、おおむねうまくいき、その報告書については、来週には英語訳が出来るので、その英語訳をくださることになった。また、その報告書をわれわれの年度末の報告書に転載することについては快諾して下さった。

成果は、ダイコンは12kg/m²、ほうれん草(プリムス種)は740g/m²、ほうれん草(マジェスタ種)は690g/m²であった。Germinaison の率は、ダイコンが45%、ほうれん草(プリムス種)が100%、ほうれん草(マジェスタ種)が70%である。ダイコンの成績が悪いのは、はじめの頃に害虫が発生してダメになってしまったからだ。後に害中対策を施したら成績は改善した。

われわれとの協力関係については、ぜひとも継続して行きたいとのことであり、ほうれん草はうまくいきほうれん草の味にもモンゴル人は慣れて来たとし、すでに新しい種も畑から得られた。来年はぜひダイズを試したいので、ダイズの品種3～5つを試してみることは出来ないか。来年は20m²以上の畑で実施したい。3年続けて収穫があれば、その野菜はモンゴルでも栽培可能であるということである。また、今は海拔1200mの地点で実験しているが、海拔800mの地点でも実験したいということであった。

バトナムフ先生の学生に、住民に巡回指導をしてもらう可能性についてお伺いしたところ、それはもちろん可能であるということであった。ただし、その場合は優秀な学生を用いなくてはならない。農業大学では、現在は学生実習費は一日1000tg支給しているが、昨年以来物価が上昇しているために学生から引き揚げ要求があり、2500tgにすることを大学は検討中である。であるので、巡回指導する学生には、最低でも一日2500tgを支給してもらうのがどうだということであった。

最後に、バトナムフ先生から次のような要望があった。バトナムフ先生は現在、ウブスハンガイ県での大統領直轄の政府の砂漠化防止プロジェクトの責任者をしており、毎週末そちらに行っている。かつて80年間ごみ捨て場だったその土地では、今、鉱山開発によって砂漠化が急速に進んでいる(小規模事業者が勝手に掘り起こして、植生を破壊しているということである)。そこでまず、日本製のある薬品をもちいてゴミを無害化したのち緑化活動を行っている。このプロジェクトにはJICAを通して福岡の大学も参加しているということであるが、埼玉大学も参加してもらえないか、という提案があった。われわれは主として人文社会系の専門家が多いことを述べたが、それでも大丈夫ということであった。私では判断できないので、とりあえず、プロジェクトペーパーを送ってもらうように依頼しておいた。

■10月31日：ダワーさん宅訪問

まず近況であるが、奥さんが信仰深いということで表彰され、メダルと賞状を授与されたということ

で、そのメダルと賞状をみせていただいた。とても良いお話しである。

他方、今のホロー長は何の連絡もくれないし、何にもしないと、不満が述べられていた。ダワーさんによれば、前のホロー長はよくゲル地区のいろいろなお宅を訪ねて歩くなど、よくがんばってくれたということである。なお、第53学校のアミド先生は一度訪ねてきて下さったことがある。

昨年に引き続き、今年は収穫もうまくいった。温室ではトマトとキュウリ、外の畑ではターサイと春菊、ジャガイモを育てたが、ターサイと春菊については、外の畑にそのままにしておき、種子が来年まで持つかどうかを見ている。梶島先生が持ってきたミニトマトも、温室から部屋に移して育てており、美味しく実がなった。ジャガイモは25kgの収穫が得られた。ターサイと春菊は、10月半ば頃まではそれぞれきれいな花をつけて、近所の人も「きれいな花だけど、何の花なの？」と聞いていくなど、周りの人の興味を引いていた。

収穫したキュウリなどはピクルスにして食べている。また庭に植えてあるブルーベリーでジャムを作ったりもしている(いくつものジャムやピクルスの瓶があった)。特にキュウリは1kgぐらいのとても大きいものができたが、訪ねてきた人にあげてしまった(とても残念なことをした)。旧正月やナーダムなどのお祭りの時に子供や孫たちがやってくると、ピクルスやジャムを出す、孫たちがとても大好きで、すぐに全部食べてしまう。孫たちが来て美味しいといって食べていくのはとても楽しいが、すぐに無くなってしまうので、普段は食べないようにしている。

ダワーさんは、こうして子供たちや近所の人たちが、畑や収穫を見て評価してくれるので、自分のやっていることがみんなに知られるのがとても嬉しいとおっしゃっており、来年も是非、畑を継続してもっと野菜を作り、野菜パーティーを自宅で開きたいと希望されていた。一番大変なのは水だが、収穫した野菜を人にあげると、水を汲んできてくれる人もいる。

なお、本当は、今年も収穫祭に向けてあれこれ考えて準備していたのだが、収穫祭の日にちを誰も教えてくれなかったので、行けなかったのがとても残念だった(と、ちょっと怒っておられた)。

最後に、12月に日本で開催予定のシンポジウムのための来日を要請すると、とても名誉なことなので、是非、モンゴルとゲル地区を代表して行ってきたいと考えているとのことであった。そしてできればその折りに、日本の農家を訪ねてみたいと希望された。日本の農家ではどのように野菜を育てているのか、できれば一緒に農作業をしながらやり方を学び、そうして得た知識を近所の人や親戚の人にも教えてあげたいと考えているということであった。